2部リーグ優勝

女子グランドホッケー部1部リーグ昇格

4月3日から7月2日まで、駒沢オリンピック公園などで2022年度関東学生ホッケー春季リーグ戦が行われた。本学体育会女子グランドホッケー部が女子2部リーグで優勝し、最終日の入れ替え戦を経て見事に1部リーグへの昇格を果たした。

全員で掴んだ1部リーグ昇格

勝利の瞬間、歓喜するイレブン

2部リーグでは、横浜市立大学、東京大学、東京女子大学、津田塾大学、防衛大学との5試合を勝ち抜き、最終日の学習院大学との入れ替え戦で接戦を制した。また、2部リーグのベストイレブンおよび最優秀選手に福島結菜さん（理物4）、ベストイレブンおよびGK王に高橋カレンさん（文史4）、ベストイレブンに吉川美帆さん（総看4）が選ばれた。

主将の福島結菜さんは「最終戦の学習院大学との入れ替え戦では、0対0で試合終了を迎え、SO（シュートアウト）戦にもつれこむ苦しい展開となりました。しかし、全員が自分たちの勝利を信じて応援し、GKと5人のシューターの活躍のおかげで勝利をつかみとることができました。勝利が決まった瞬間に、チームメートと抱き合ったあの感動は一生忘れられません。私たちは、他大と比べてグランドの練習環境に恵まれていませんが、そのような中でも幹部で勝つための話し合いを重ね、部員全員が同じ方向に向かって一致団結して練習に励んできました。その成果が目に見える形で現れ、大変嬉しく思います。秋季に対戦する1部リーグには、日本代表候補や中高のホッケー経験者を有するチームも多く、厳しい戦いが待っていることと思います。ですが、格上が相手でも攻める気持ちを忘れずに、一戦一戦を大切に戦っていきたいと思います。日頃から応援してくださる方、支えてくださる方への感謝を忘れずに、より一層練習に励んでいきます。ぜひ応援をよろしくお願いします」と話している。

ひと

男子ラクロス世界選手権大会5位

小さな成功体験の積み重ねが大きな自信に

8月にアイルランドで行われた男子21歳以下ラクロス世界選手権大会で、日本代表選手として5位入賞という輝かしい成績を残した竹田雄介さん（経済4）。競技歴わずか2年足らずで日本代表の座を勝ち取り、体育会男子ラクロス部では主将としてチームを牽引する。バイタリティ溢れる原動力にせまった。

「ひとことでいうとわんぱく少年でした。好奇心旺盛で、水泳、テニス、バドミントン、将棋と興味をひかれるものには一通りチャレンジしてきました」自身の幼少期の様子について竹田さんはそう振り返る。

楽しいと思えるものには時間を忘れて没頭するといい、中高時代にはバスケットボールに打ち込んだ。朝から晩までバスケットボールを追いかけていた竹田さんが、ラクロスという競技と出会ったのは偶然だった。

19年4月、新入生として参加した新歓イベントで、ラクロス部の見学に行きたいという友人にしぶしぶ付き添った。「その友人がいなければラクロスとは無縁の人生だったと思います。たまたま参加した練習で、クロスと呼ばれる道具に初めて触れ、それ一本で多彩なテクニックを繰り出せることに競技の奥深さを体感し、心を奪われました。しかも、ラクロスという競技は大学から始める人が多く、自分の頑張り次第で日本一や日本代表も狙えるということも、モチベーションになりました」

経済学部
経済学科
4年
竹田　雄介さん

持ち前の好奇心と集中力で着実に腕を磨いていった竹田さんだったが、万事順調という訳ではなかった。新人戦で関東3位という好成績を残しながらも、19歳以下の日本代表に召集されず、初めての挫折を味わった。

「結果を出していたのに認められなかったことで、大変悔しい思いをしました。次のチャンスは必ずものにすると心に決めました」

落胆する間もなく、とにかく徹底的にラクロスに向き合った。「うまくいったプレーも、うまくいかなかったプレーも、何度も自分たちの映像を見返しました。オフの日には他大学の練習に参加し、多彩な技術やプレースタイルを毎日研究していました」

80人もの部員を束ねる主将という重責も、彼にとっては成長の機会となった。チームの一体感にバラつきを感じたときには、一人一人のメンバーと向き合い、ビジョンを共有して激励した。「仲間を信じて任せることで当事者意識を伝播させ、高い目標に対する一体感を作れたと思います」

ラクロスというチームスポーツにひたむきに打ち込み、困難や悔しさに直面するたびに、「自分なら乗り越えられる」と奮い立たせてきた。そして、全国から精鋭が集まる代表選考会の場で掴んだ日本代表の座と、世界選手権5位という栄光。たゆまぬ努力が導いた成果だった。その原動力について、竹田さんは照れくさそうにこのように語った。

「一番かっこいい男になりたいと思っています。憧れの人ならどう考えるか、かっこいい男ならどう行動するか。理想の姿と自分の姿を常に照らし合わせてきました。些細なことでも疎かにせず、小さな成功体験を積み重ねることが自信に繋がり、大きな挑戦へのモチベーションとなっていると思います」

3年ぶり対面開催決定

第76回ソフィア祭

11月1日～4日

課外活動団体のソフィア祭実行委員会が、今年で76回を迎えるソフィア祭（学園祭）を、11月1日から4日にかけて3年ぶりに対面で開催する（11月1日は前夜祭）。

今年のテーマは〝WITH〟。多くの在学生、OBOG、ゲストや来場者、さらには未来の上智生と『一緒に』ソフィア祭を盛り上げていきたい、という思いを込めた。実行委員会は、そのテーマのとおり、全学がひとつになれる行事を多くの人に知ってもらいたいと、対面でのソフィア祭未経験者を含む多くの在学生に働きかけた。その呼びかけに応える形で、延べ100を超える学内団体が教室、ステージ、模擬店の各企画に参加を表明した。

実行委員長の竹田さん

本祭では、ゲストによるトークショー、学科模擬授業などに加え、昨年、一昨年のオンライン開催でも盛り上がりを見せた「Sophian's Got Talent」「Sophian's Contest」の2つの目玉イベントが予定されている。どちらも、2020年の新設以降初めて、来場者を迎えての開催となる。

「Sophian's Got Talent」では「上智大学から未来のスターを発掘しよう」というコンセプトのもと、候補者が自らの特技や活動をアピールし、優勝者を「ソフィアンズスター」として表彰する。

「Sophian's Contest」では、候補者自身の魅力に加え、社会課題に対する取り組みを発信するインフルエンサー（＝影響力のある情報発信の担い手）としての活躍を競う。今年のテーマは「origin」。「本学の起源に遡り、ソフィアンと呼ぶにふさわしい人を輩出したい。性別など様々な違いにとらわれないコンテストとしての「起源」になれたら」という願いが託されている。

ソフィア祭実行委員長の竹田満音さん（理物3）は、「2年間のオンライン開催で培った映像技術などのノウハウを存分に活かし、日頃活動に励む団体や上智生の魅力を伝えられる企画を準備しています。参加団体だけでなく、多くの来場者の方と一緒に作るソフィア祭が今年の目標です。是非お気軽にご来場ください」と呼びかけた。

詳細はウェブサイトから。

SSIC2年ぶりの研修旅行

金沢で学生交流、日本の歴史・文化を学ぶ

本学SSIC（Sophia・Student Integration Commons）は、8月6日と7日の1泊2日で、感染対策をとりながら石川県金沢市で2年ぶりの研修旅行を開催した。日本人学生と留学生の12人が参加し、共に金沢の歴史・文化・伝統技術を体験。感染症拡大によって学生同士の交流や行動範囲が制限される中で、今回の研修旅行は学生たちにとって特別な思い出をつくる場となった。

落雁作りに奮闘

SSICの宿泊を伴う研修旅行はこれまで広島、京都、長崎で実施され、今回で5回目。研修は出発前の事前研修と、各学生が金沢について関心のあるトピックを調べてまとめる旅のしおりづくりから始まった。

金沢での1日目は城下町の見学に加え、老舗菓子店での落雁作りや金箔貼りを体験した。学生同士が助けあいながら互いの距離を縮めた。

2日目は、加賀藩の歴史ともいえる金沢城と歴代藩主が慈しんだ兼六園を見学。その後、2004年に開館した金沢21世紀美術館で現代アートを体感した。

参加した学生からは「将来国際社会で活躍したい自分にとって、留学生との交流は大変有意義であった」などの感想が寄せられた。

金沢研修旅行のレポートはこちらのウェブサイトから。

溶解処理後の機密書類がトイレットペーパーに再生

学内でSDGs実現に向けた新たな取り組み

本学では、ソフィアキャンパスサポート（SCS）協力の下、学内で回収した機密書類を溶解処理し、学内使用のトイレットペーパーにリサイクルする取り組みを6月9日から開始した。

溶解された書類はトイレットペーパーに

溶解した書類を原料に使用することで森林保護に貢献するとともに、SDGsの「持続可能な方法で生産し、責任をもって消費する」という目標実現に向けた取り組みにもつながっている。

トイレットペーパーの製造原料とならないハードカバー書籍、色紙などを除き、学内すべての研究室、事務部門から出された書類が鶴見製紙株式会社の協力で無償回収され、年間の溶解処理費用の大幅な削減も見込まれる。

回収当日には、管財グループ職員とSCS社員が鶴見製紙川口工場で溶解処理現場に立ち合い、溶解処理からトイレットペーパー完成までの工程を視察した。